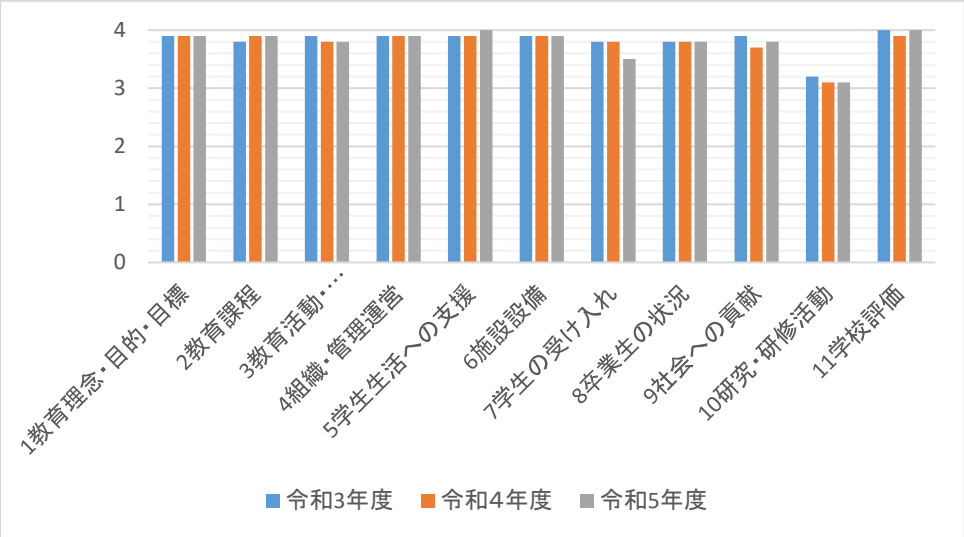
2023（令和5）年度　自己点検・自己評価　　最終評価　総括

金沢医療センター附属金沢看護学校

○　大項目　評価点平均比較



【評価基準】数値は目安
4点：適切　80↑
3点：ほぼ適切　70↑
2点：やや適切　60
1点：不適切　50↓

○大項目最終評価概要及び今後の課題

1．教育理念・目的・目標（3.9点）

教育理念は指定規則および国立病院機構の理念を反映している。当校は自主自学の精神を土台に人間性、看護を実践するための基礎的能力、専門職としての主体性を育成することを目標としている。この理念・目標を達成するために教員が一丸となって取り組んでいるとともに、実習施設との実習指導者会議や講師会議等の機会にも説明し共有を図っている。学生に対しては、入学時オリエンテーションをはじめ、他校との交流の機会である学生フォーラム、高校生対象のオープンキャンパスなどで、教育理念、目的・目標を伝え、当校がめざしている看護師像が伝わるように努めている。教育理念、目的・目標が学生にとって学びの指針となるよう機会を捉えて伝えていきたい。

ディプロマポリシーや期待される卒業生像をめざし、演習や実習を実施し、看護実践力を高められるよう努めている。最終実習である総合実習の目標は、期待される卒業生像の評価に通じるように設定しており、卒業時の課題を明確化できるように支援、評価している。また、卒業前演習でも実践力の強化を図っている。教員は、教育目的・目標の達成に向け学生に対し個人・グループ等様々な方法で関わっているが、卒業時に学生が持つべき資質を備えているかという点では難しさを感じている。学生の評価は概ね3以上ではあるが、学生の状況に応じて、理解度や思いを確認しながら関わっていくよう努めていきたい。

令和４年開始の新カリキュラムの充実に向け評価、検討を重ねた。学生にはシラバスに記載した教育理念、目的・目標、またディプロマポリシー・期待する卒業生像が浸透するように、各学年の状況に応じた活用を行っていきたい。

2．教育課程（3.9点）

学習の順序性・関連性を考え編成されており新入生オリエンテーション、学期はじめにシラバスを用い説明をしている。また、教育理念の独立行政法人国立病院機構に貢献できる学生の育成という観点から、北陸地区にある機構病院での実習や研修を計画し、機構の役割の理解を深めている。学生は、政策医療を担う各施設で特色的な看護を見学・体験し、就職先として選択する場合もある。今年度もCOVID-19の影響を受けることもあり、感染対策と実習方法の工夫、実習施設関係者の協力により、臨地での実習をほぼ実施することができた。

母体病院は災害拠点病院であり災害訓練に参加した。事前学習や準備、訓練への参加を通し、災害看護への学びを深め医療従事者としての自覚を高める貴重な機会となった。

高齢社会を踏まえ、老年看護学実習の場として、老健施設や高齢者の生涯学習の場との関係性を継続しており、高齢者の理解及び看護実践を学ぶ機会となっている。

授業評価は成績には一切関係しないこと、個人が特定されないことを事前に学生に説明している。また、無記名であることから、時に学生が感情的な表現で記述する場合があるが、会議資料等で講師個人が特定されないように配慮している。Webによる授業評価に変更し、QRコードの活用など工夫してきたが回答率が低い状況が続いている。学生の意向を確認したり理解を得ながら、教育課程の改善に活用していきたい。臨地実習に関する学生の自由記載の意見について、真意の把握に努め実習環境の把握や調整を図っている。

3．教育活動・教育指導のあり方（3.8点）

学生の学習を動機づけるために、ガイダンスを年度初め、学期の初めに実施している。履修規定は学生便覧に明示し、学生が困った時には学生と共に学生便覧やシラバスで確認するなど学生が主体的に行動できるよう、また不利益が生じないよう支援している。

看護技術演習等は40人を超えることがあるため支援教員を複数人配置し、技術習得に繋がるように計画している。また、授業内容、方法によっては40人クラスで実施している。

３年次の国家試験対策は、チューター制度の導入を試みたが十分に機能しなかった。また、国立病院機構の医師、看護師の協力を得て講義を実施し強化した。

教員は授業を公開し教員間相互評価を行った。また、技術演習の授業案を教員会議で共有し教員間で学び合う機会としている。

国立病院機構東海北陸グループ3校（令和4年度は4校）の教員と2年間にわたり、新カリキュラムの授業研究を行った。今後自校のカリキュラム運営に活かしていけるとよい。

成績評価や単位認定に関しては、学期単位で学校運営会議にて認定をしている。学生の学力低下、生活指導に時間を要するなど専門的な知識・技術を教授する以外の事象に労力を必要とする現状があり、授業準備や教材研究の時間確保が困難な場合もある。セルフマネジメントやタイムマネジメントに取り組み、チームワークを図りながら時間確保し学生の主体的な学びにつながる授業案作成など取り組んでいく。

実習施設とは実習指導者会議を通し実習目標や内容、指導方法を情報共有し、意見交換している。実習指導者の経験を考慮しながら効果的に指導するために、実習指導状況の把握に努め共に実習指導案を作成したり、指導実践の中で指導方法について意見交換するなど取り組んでいきたい。実習施設のCOVID-19によるクラスター発生時は、母体病院の協力と実習方法の工夫、グループの再編成により実習できるように配慮した。

4．組織・管理運営（3.9点）

講師の確保については、母体病院職員の協力を得ながら配置できている。毎年、年度初めには学校目標が趣意とともに説明され、教員会議において運営指針や改善に向けた取り組みや考え方などを共有できている。教員の配置・職務分掌に関しては、教育主事のもと、各教員が役割分担されている。役割に偏りが生じていないか、効果的な職務遂行がおこなえているか担当者会等で状況を共有し適宜調整を図っている。

学校内の会議についても計画的に実施し、学校の運営に関して広く意見を募る機会を設けている。質・量ともに優れた専門職業人を養成するための学校のあり方について経営・人材育成等の視点から各教員が組織の一員として取り組んでいけるよう体制は整っている。

教員は、専門領域ごとに配置しているが、キャリアアップや実践能力強化に向けた実務研修や管理研修を計画的に行っていきたい。

施設の老朽化に伴う整備や修理、必要物品の購入や修理などは病院事務に確認、相談しながら進めている。職員は意識を持ち、教材や教具の適切使用や必要に応じた購入を行っている。また、教員の超過勤務といった時間管理の改善は課題である。11月から出退勤システムが導入され、勤務時間の管理に意識が高まっている。教員が学校の経営状況に関心をもち、自己管理しながら日々の仕事に従事できるよう取り組んでいきたい。

5．学生生活への支援（4.0点）

COVID-19が感染症法上で５類に変更され、社会でも感染対策が緩和されている中、母体病院や実習施設と連携しながら学生に適宜指導をして感染対策を実施している。感染対策については、教員側からの働きかけによる行動が多い現状であり、学生が主体的に学校生活での感染対策を実施できるように指導・助言を続ける必要がある。

学生相談室を２回/月で実施し、掲示、全館放送などで学生に周知している。利用状況は昨年度より若干多くなっている。プライバシーを保持できるように申込方法を工夫している。進路相談をはじめ学生からの相談は各学年担当の教員が窓口となり、相談内容に応じて適切な担当者で対応しており、継続していく。

COVID-19禍により自粛していた課外活動やボランティアなどは制約を緩和している。現段階では自ら地域活動に参画する学生は非常に少ないため、教員が介入し活動を支援している。また感染対策の上、安全に活動できるように支援していく。

母体病院の協力のもと、希望する学生が看護アシスタントとして採用されている。役割を果たし今後につながる経験となるよう支援を継続する。

学生自治会活動の機会を設け、教員の支援体制は整えている。今年度は、学校祭と病院祭が同時開催され、学校の情報を発信できる機会として役割を果たすことができていた。学生自らが自治会活動の意義や役割を認識し、意識的に遂行できるように教員からの支援を継続する。

宿舎の入居者の減少に伴い、管理費や光熱費の金銭的な負担や学生による自治運営の負担が増加している。現状の中での生活の工夫や経費の見直し、入学希望者への広報など入居者の確保のための取り組みを継続していく。

6．施設設備（3.9点）

学生数に応じた施設基準を満たしており、学生の学習に支障はきたしていないと考える。図書室・AV室はCOVID-19の影響で入室制限を実施してきた。また、憩いの場が少なく学生が密になっている場所があるため、制限の見直しを検討していく。
教材教具は学生に見合った数を整備し自己学習に活用できている。また学生と共に定期的に点検している。近年多様な教材が開発されているため教員のニーズや授業内容に応じ整備していく。

7．学生の受け入れ（3.5点）

高校教師対象の学校説明会やオープンキャンパスは現地開催した。遠方の参加者の利便性やCOVID-19感染対策への配慮からオンラインも企画した。高校教師対象の学校説明会では高校生のニーズ等情報収集の場にもなっている。オープンキャンパスは、土日に開催し、保護者を含め参加者が増加している。今年度は病院が150周年であり、学校祭と病院祭が同時開催となった。次年度も同時開催の予定であり、学生確保の機会として効果的に活用していく。
新入生から母校の後輩に向けてメッセージを送った。今後受験を検討している学生の参考となり、学生募集につながることを期待したい。
令和4年度より社会人入試を導入し毎年2名の受験があった。社会人に向けた情報発信を強化するとともに、推薦入学者確保のため推薦入試の基準を見直していく。
令和4年度より学生募集のポスターを金沢駅構内に掲示している。今後はホームページの更新やインスタグラムでの情報発信など定着させると共に強化していく。

8．卒業生の状況（3.8点）

3年次は実習をしながら就職活動していくことになるため、1，2年次からの進路相談を行っている。学生とのコミュニケーションを密に図りながら、悩んでいる学生や採用試験の不合格者に対してタイムリーに相談にのる体制を継続する。
卒業生の進路に関するデーターは整理されている。卒業後のフォローアップとしてホームカミングディを開催しているが参加者が少ないため、ニードを確認し時期や方法を工夫していく。
国家試験合格率の維持にむけ、特別講義（母体病院の医師や看護師の協力を得る）の実施を継続する。学校職員による細やかな支援など国家試験対策の強化を図る。

9．社会への貢献（3.8点）

教員は県内や国立病院機構病院の実習指導者講習会の講師として役割を果たしてきた。感染予防対策を図りながら対面での広報活動や地域貢献のための活動を増やしていく。

10．研究・研修活動（3.1点）

東海北陸グループ内の他校の教員とグループを編成し看護教育研修会としての研究活動を行っている。活動で得た知見を今後の教育実践に反映していくとともに確実に発表できるように取り組んでいく。また、看護教育研修会の活動（授業研究）に加え、各自が課題解決や教育の質向上につながる研究に取り組んでいけるとよい。
研究助成金制度を活用し、学会や研修に参加し自己研鑽を図るようにしているが参加頻度は職員によって差がある。今後は全職員が妥当な計画を立案し確実に参加していく。
研究助成金制度、研究に必要な設備・機器の整備、勤務時間内で行える体制など整備を進めている。研究活動の活性化に向けては、教育的な支援の充実も図って行く必要がある。

11．学校評価（4.0点）

ワーキンググループを中心に定期的に実施し、教育活動に活かしている。今後も計画通り実施し取り組みに活かしていく。